

# 西原町の歴史

## History of Nishihara

### 琉球王国時代～沖縄戦～現在

西原の名称は、琉球王府のある首里の北(方言でニシという)にある地方から由来しています。琉球王国時代、当時の西原間切は首里王府の直轄領となっており、その領域は、北は津堅島(現うるま市)、西は石嶺、末吉、天久を越えて泊まで及ぶ大きな行政圏を構成していました。

明治41年の特別町村制の施行にともない西原村となり、大正9年にはほぼ現在の領域になりました。昭和20年の沖縄戦では、米軍が上陸した読谷の海岸から司令部のあった首里へ進軍する通り道となり、西原は激戦地帯となりました。住民の約半数が戦争の犠牲となり、全世帯のおよそ四分の一が一家全滅するという、深い傷を残しました。戦後は製糖工場が建設され、さとうきび産業が産業の基幹を担いました。また沿岸部を中心に企業集積が進み、復興・発展を遂げました。現在では県内随一の製造業出荷実績を誇ります。

また昭和54年に国立琉球大学、平成元年に沖縄キリスト教短期大学(現在の沖縄キリスト教大学院大学・短期大学)が移転。若者の活気に満ちた「文教のまち」として知られています。

#### 棚原の石畳道

棚原の石畳道は公民館の南側、集落を南北に貫通する東端に敷かれたもので、道幅が1.8メートル、長さ約27メートルである。小橋川の石畳道同様人頭大の自然の石灰岩をまばらに敷き詰め、その間に拳大の小きな石を密に敷き詰めていくタイプのものである。石畳道の周辺は竹や木々が生き茂り風情がある。

The name Nishihara originates from its location to the north ('nishi' in local dialect) of Shuri, the seat of the Ryukyu royal government.

In the Kingdom of Ryukyu period, Nishihara was directly controlled by the Shuri royal government, and the territory encompassed a large administrative area including Tsuken Island (now Uruma city) to the north, Ishimine, Sueyoshi, Ameku and beyond to Tomari to the west.

In 1908 when the special towns and villages system came into effect, it became Nishihara Village, and in 1920, its boundaries were largely fixed where they are today.

In 1945 during the Battle of Okinawa, Nishihara lay in the path of American forces which landed on the Yomitan coast and advanced towards the headquarters at Shuri, making the village the site of a fierce battle. About half the populace fell victim to the fighting, and about a quarter of all households were lost completely, leaving the region deeply scarred.

After the war, sugar manufacturing facilities were built here and sugar cane production became the main industry. In addition, businesses concentrated in the coastal region, driving reconstruction and development. Today, Nishihara boasts Okinawa's highest level of industrial production.

In addition, the Okinawa Prefectural University of the Ryukyus moved here in 1979, and the Okinawa Christian Junior College (now the Okinawa Christian University and Junior College) in 1989. It is renowned as a place of learning and youthful vigor.



#### サワフジ

サワフジは奄美以南に自生する樹木で、夕方に咲き、翌朝には散ってしまう花をつけます。このサワフジの木は西原町の花木に認定されており、樹齢は約470年といわれています。平成24年5月に町の天然記念物に指定されました。



**先王旧宅碑**  
1738年につくられた石碑。尚円王の旧宅を整備した事が記されていましたが、沖縄戦で破壊されました。

#### 東江御殿

内閣御殿(東江御殿)は、金丸(のちの尚円王)の旧宅跡に、没後90年を経たのちに建てられました。その後、2回の改修を経るも沖縄戦で破壊、現在の建物は、戦後1951年に再建され、1974年に改築されたものです。



**棚原ノ口殿内(ドゥンチ)**  
18世紀の史料に記され、建物中央の祭壇にミルク神が安置されています。棚原のミルク神信仰は、首里から伝わったといわれます。



**棚原比嘉家の土帝君(トゥーティーケー)**  
祠は、内法で開口50.5cm、奥行54cm、高さ50cmの石灰岩の3枚の切石で寄棟形に加工した屋根石を支えている。その内部には神体として夫婦をあしらった赤褐色を呈した陶製の男女一対の土帝君の神像が安置され、その前面には陶製の香炉が置かれています。



**ウワーフル**  
棚原集落内にある宮里家跡に残された、ブタ小屋をかねた便所跡です。石積(いしづみ)でつくられた小屋のトゥーシヌミー(穴)から人が尿をたすと、ブタがそれを食べるしくみになっていました。



**石ジシ(イシジシ)**  
呉屋モーのふもとにあり、ほぼ運玉森を向くように置かれています。珊瑚石灰造で造られており、運玉森のヒーゲーシ(火返し)といわれ、また運玉森のふもとにある桃原の石獅子は呉屋の石獅子のゲーシ(返し)といわれています。

## 沖縄の「ねずみ小僧」<sup>うんたま</sup><sup>ぎるー</sup> 運玉義留

昔、運玉森に義留という若者が住んでいた。ここから運玉義留と呼ばれるようになった。彼は、幸地殿内という身分の高い、金持ちの家の使用人であった。あるとき、義留は主人の髪を結いながら「私たち百姓でも三司官になれるか」と問うた。すると、主人は「アバビチャー(蛙)の子は、アバビチャー。百姓の子はいつまでたってもた。おす」と答えた。その言葉を聞いて、「よし、それならば、大泥棒になって後世まで名を残したほうがいい」と盗人になる決心をした義留は、さっそく、主人に「今夜、あなたの黄金の杖を頂きに参ります」と予告した。うんたま

その晩、主人が、家来に言い付けて見張りをさせていたので、屋根内に忍び入った義留は、持ってきた細かい砂を屋根にパラパラと撒いた。その音聞いた主人は、雨の音と勘違いし、「今日は雨が降るから義留は来ないよ」といつく寝てしまった。義留は、そと寝室に忍び込んで主人の耳に水滴を垂らし、主人が寝返りをうった際に「黄金の杖を奪い取り、ご主人、黄金の杖はいただきました」と叫んだ。主人が「こ池まで逃げた下に隠れ、竹筒で呼吸をしながら息を潜めて逃げたぞうだ。あるとき、たいへん貧乏な夫婦がいて、娘を遊女に出さなければならぬほどお金に困っていたぞうだ。そのことを知った義留は、「さっさと、お金を持って来なさい」といって、お金を持ってきたぞうだ。お金持ちからお金を盗み、貧しい人たちにわけ与えていたぞうだ。また、義留の家来に油壱坊主という利口者がいて、二人で力を合わせ貧乏人を助けたぞうだ。

(『西原町史』別巻「西原の民話462～480頁から再構成」)  
(注2) 三司官…王府時代の国政を司る3人の宰相のこと

もっと詳しく  
調べるなら  
ココだ!



西原町立図書館

(抜粋)

# 西原の歴史

## 琉球王国時代～沖縄戦～現在 History of Nishihara



**正保国絵図**  
江戸時代、徳川幕府は全国的な国絵図を、慶長・寛永・生保・元禄・天保の5回調製、「琉球国絵図」は生保以降の3回分が調製された。



**1471(尚円2)年琉球国金盛丸主書状**  
前年王位に就いた金丸(尚円王)が島津氏に宛てた書状で、「琉球国」の表記が見える。年代は特定できないが、尚円王の在位が1470-76(文明2-8)年なのでその間に出来たものと思われる。

戦前



**尚円王御後絵**  
御後絵(おごえ、方言ウグイ)とは死後に描かれた国王の肖像画。この尚円のものももっとも古い。制作年代は不明。



**ペリー艦隊の随員が描いた木版画**  
タイトルは「探検家たち一琉球一夜営」。隊員たちがテントを張って夜営している広場は、字小橋川の上又松尾(イヌマーチャー)だと見られている。



**1909-10(明治42-43)年ごろの我謝馬場**  
馬場は幅約14m、全長約330m余、戦前は見事なクワディーサー並木で有名だった。ここで原山勝負・大綱引き・競馬・小学校の運動会などが行われ、村の公共広場として使用された。



**1932(昭和7)年 沖縄製糖株式会社西原工場**  
台南製糖(株)が社名変更してできた会社。台南製糖(株)は1917(大正6)年、その前年設立の沖縄製糖(株)(名称は同じだが別会社)と沖台拓殖製糖(株)が合併してできた製糖会社である。



**1937-1938(昭和12-13)年ごろの字小那覇の商店**  
旧小那覇大通りにあった雑貨店・大城商店。現在の小那覇交差点、国道329号の東寄り、小那覇川のすぐ北側にあった。



**1937(昭和12)年 戦前の字小那覇の綱引き**  
小那覇では綱引きはウファチジナ(お初綱)とかチフィヌウグワン(綱引きの御願)とか呼び、旧暦6月25日に行われた。綱引き行事は現在も伝承されているが、戦前の方が盛大で、より生活に密着していたことがうかがえる。

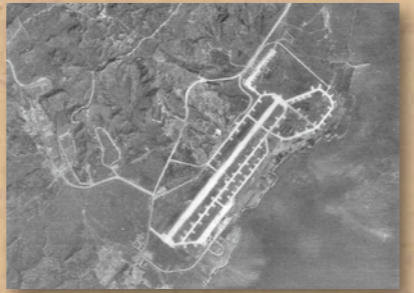
戦時



**1945(昭和20)年 字小那覇 雨でぬかるんだ道路**  
西原村一帯を占領した米陸軍部隊が上陸艇で南の方向に行進する。左手奥の山は運玉森。



**1945(昭和20)年 運玉森が見える空中写真**  
米軍の説明によれば、「南部東海岸の与那原を見下ろす円錐型の丘に、迫撃砲や機関銃、砲撃による被害が見られる。小さな白い斑点は地上軍が降りしきる雨を避けるためにたこぼ塚の上に立てた携帯テントである」という。「円錐型の丘」は運玉森を指す。



**1945(昭和20)年12月10日 米軍が撮影した「与那原飛行場」**  
旧日本軍「沖縄東飛行場」だった同飛行場は字小那覇に作られた。沖縄に上陸した米海軍に収容され、専用飛行場として補修、滑走路を6500×150フィート(2130×45m)に拡張して開設された。

戦時



**1953(昭和28)年 西原中学校(現・西原小学校敷地内)の校舎修理作業**  
お互いに協力しながら校舎の修理にあたっている生徒たちの表情は明るい。戦後の校舎は、空き地を利用した青空教室から始まった。

戦後



**1959(昭和34)年 字翁長の元西原国民学校敷地に新築移転したころの西原中学校**



**1968年(昭和43) 西原温泉**  
1957(昭和32)年、ボーリング中に温水がふき出し、調査の結果、アルカリ性温泉であることが分かり、沖縄では数少ない温泉施設として整えられた。

戦後



**1947-51(昭和22-26)年 坂田初等学校時代の運動会**



**1994(平成6)年 翔南製糖株式会社 西原工場(旧中部製糖株式会社 第一工場)**  
同工場は長年にわたって西原の糖業だけでなく、産業全体を牽引してきた。

戦後



**琉球大学**  
1950(昭和25)年、首里城跡に開学。1979(昭和54)年に現在の字千原に移転した。県内唯一の国立大学法人。

現在



**沖縄キリスト教学院大学・同短期大学**  
1959(昭和34)年、那覇市首里に開学。1989(平成元)年に現在の字翁長に移転。開学当初は短期大学のみだったが、2008(平成18)年4月に沖縄キリスト教学院大学が開学した。



**マリントウン東崎**  
西原与那原地区の活性化のため、沖縄県、西原町、与那原町が共同で海辺のアメニティー豊かなまちづくりを推進する「中城湾港マリントウンプロジェクト」によって造成された。ビーチが整備された西原マリパークをはじめとした緑豊かな公園、住宅や工業地域などが整備された。



**発展する町**  
西原の産業を長年支えてきた製糖工場の跡地に大型ショッピングセンターがオープンするなど、まちの風景は時代とともに変化し続けている。今後も道路事業や区画整理事業などの進捗に伴い、発展を続ける。